

Judith Wright の詩と Pioneer Women

(2) 生命の誕生と子供時代

Judith Wright's Poems and Pioneer Women :

(2) Regarding Birth and Childhood

(1999年3月31日受理)

橋内幸子
Sachiko Hashiuchi

Key words : Judith Wright, Pioneer women, オーストラリア性

I. はじめに

Judith Wright は、オーストラリアの歴史に対して、自己の家系の歴史からの視点を持つ作家である。昨年(1998年)に上梓された自伝、*A Tale of a Great Aunt: A memoir by Judith Wright* は、彼女の家族のために書かれたものであるが、主に子供時代の思い出が中心になっている。第一章のタイトルは、「5月8日のことであるが、私は自分の子供時代の思い出を記録しようとしていた」(‘It is the 8th day of May and I am trying to record a few memories of my childhood’) で、全篇を通じて、時代の証人としての語りの姿勢が明らかである。自伝的要素や家系をテーマにした作品としては、他に *The Generations of Men* (1959) があるが、こちらは Judith の祖父母の伝記というより、小説に近い形式をとっている。19世紀のオーストラリアにおける牧畜業の開拓者として、祖父母達の生活は、時代を下って、子孫たる一詩人の手で、叙情的な年代記の中に描かれた。

Judith Wright は、1915年に、ニューサウスウェールズ州の Armidale に生まれた。故郷である、その地には、オーストラリアの自然と環境を、自己の詩に巧みに織り込む Judith Wright の作品の中でも、特別な想いが込められているといっても過言ではなからう。1946年に出された詩集、*The Moving Image* に収められた詩、“South of my days” には、その自然描写が冒頭に出てくる。

South of my days' circle, part of my blood's country,
rises that tableland, high delicate outline
of bony slopes wincing under the winter
Low trees blue-leaved and olive, outcropping granite ——
clean, lean, hungry country. The creek's leaf-silenced,
willow-choked, the slope a tangle of medlar and crabapple

branching over and under, blotched with a green lichen;
and the old cottage lurches in for shelter.¹⁾

かのニューイングランド台地は、「私と家族が住んでいた地域の南、血の繋がる地方」にあり、その高く、繊細な輪郭は、特に冬に際だっていた。青葉繁れる灌木やオリーブの木々と露出した花崗岩の岩層があるため、痩せた土地ではあっても、清らかさが漂う。また、木々の葉に遮られて、小川のせせらぎの音も低く、セイヨウカリヤンや野生のリンゴの木が斜面に生え、緑のコケも見え隠れする。そこへ、古い、傾いた田舎家がひっそりと建っているのが見える。夏には、夏の出来事があり、秋には別れがあり、やがて、冬の霜の冷たさに屋根が音をたてる。

South of my days' circle

I know it dark against the stars, the high lean country
full of old stories that still go walking in my sleep.²⁾

故郷では、星が瞬き、「多くの古い物語の人物達が、私の夢の中で、今なお歩きまわっている。」

人は生まれ、死んでいく。その人間的営み (human pattern) には、他の人間が必然的に係わらざるをえない。生まれる時には、親が係わり、成長した後は、活動範囲を広げれば広げる程、接触する人の数は多くなる。そして、人生の終わりには、夢のような一生で出会った人々が、幻影のごとく、薄れゆく意識の中でも動き回っている。

移民の国、オーストラリアの開拓者時代における「人の誕生と子供時代」の記録は、Jennifer Isaacs による *Pioneer Women of the Bush and Outback* (1990) の中でも、独立した一章として設定されている。当時の子供達の様子も、写真が示すように、いかにも「開拓者達の子供」らしい。また、今回は、昨年(1998年)に出版された Judith Wright の伝記、Veronica Brady による *South of My Days* も参照して、Judith Wright の詩に描かれた「人生の始まり」をたどることにする。Brady による伝記は、600ページに近い大著であるが、その詳細な記録は、Judith Wright の詩の理解には欠かせないものである。

II. Judith Wright の幼年時代と詩の言葉

Judith Wright の詩のタイトルに 'child' という語があるものは、*Collected Poems 1942-1985* (1994) に収められたなかでも、11篇が数えられる。つまり、1. "Woman to Child"³⁾, 2. "Child and Wattle-tree"⁴⁾, 3. "The Child"⁵⁾, 4. "The World and the Child"⁶⁾, 5. "Night and the Child"⁷⁾, 6. "The Blind Man, III. The Singer to the Child"⁸⁾, 7. "The Blind Man, IV. Lost Child"⁹⁾, 8. "To a Child"¹⁰⁾, 9. "To a Child outside Time"¹¹⁾, 10. "A Child's Nightmare"¹²⁾, 11. "Child with a Dead Animal"¹³⁾, である。本稿では、この中で、詩人の子供観を示す代表的な詩を数編取

り上げることにする。ところで、子供についての表現に関して、‘birth’という抽象語は別としても、‘baby’という語を使わないのはなぜか。それは、子供であっても、一人の人間としての意識の萌芽が見えた時こそ、詩のモチーフになることができるからである。そして、子供時代に経験した強烈なインパクトが、その人間の一生を通じて、意識下でさまざまな融合を繰り返し、思考や言動の傾向を決定する。

詩人としての Judith Wright の場合もそうである。Judith Wright の詩作品にはその詩の特質を示す、さまざまなキーワードがある。その中でも、‘blood’と‘flame’は、描かれる対象が持つ性格と詩人が付け加える主観が一体化しているものである。先の“South of My Days”にもあった、‘my blood’s country’などは、オーストラリアの大地に生き抜いてきた人間達の血縁を想起させるのみならず、その土地の自然が血肉化したものが自己であるという誇りと自負がうかがわれる。ともあれ、Judith Wright の幼年時代の鮮烈な体験が、この語‘blood’を特別な語として位置づけているのである。Brady の伝記によれば、詩人が3才か4才の頃に体験した怪我がもたらした一種の覚醒ともいえる認識が発端である。

Judith Wright は、その幼年時代に、子供として出入りを禁じられていた場所に行き、冒険を試みたことがあった。薪の山があるのを見た彼女は登って行こうと決め、登ったのはいいが、その上を走っているうちに、膝に大きな材木をぶつけて怪我をした。血が噴き出し、パーティ用の白い服（ちょうど、大人たちはパーティをしていたのである）、青いベルト用リボンと白い靴下も血に染まった。後年、その時のショックは詩の中でも語られる。

The world went scarlet with shock
and shock with appalling noise
like the yell of a branded calf.¹⁴⁾

それまで、彼女の意識は周囲の環境の中に溶け込み、未分化の状態であった。それが、赤い鮮血と痛みのショックによって、周りのもの対自分という図式を理解するようになる。

It was the sudden knowledge of my separateness from everything else
that was making me howl and so loud. I had been enclosed in what I
might now describe as a space-time continuum which included myself,
now I was alone, in pain and trapped in a single limited person.
There I would have to say until I was old and died—as old as my
grandmother.¹⁵⁾

それは、自己を個として認識した始まりであった。自分は、周囲の生きとし生けるものから分断され、痛みと孤独の中で年老いて死んで行くのではないかという恐れ。ちょうど、自分の祖母のよう

に、である。子供時代の記憶としては、楽しい至福の瞬間よりも、恐怖や痛み、不安などといった否定的な要素が一生を通じて残りやすいのはなぜか。おそらく、学習という観点からすれば、ごくあたりまえなことでも、周囲との一体感を享受してきた子供にとっては、それまでの自己を揺るがす経験から受けるショックは大きい。‘blood’という語が、繰り返し使われ、その喚起力が造形するイメージの印象は鮮烈である。

さらに、同じ系統の色と熱、及び輝きで人間を魅了しながらも、エネルギーと破壊につながるものという両義的な意義を持つものに、「炎」(flame)がある。詩集 *Woman to Man* (1949) には、“Flame-tree in a Quarry”があるが、詩全体を通じて、その flame-tree (セイヨウアオギリ)の赤い花が人間の肉体に呼応するように描かれている。「渴きを癒すように、おまえを見ると/私の身体は炎で燃えさかる。」(I drink you with my sight / and I am filled with fire.) その他の詩にも、‘flame’は、命と破壊などのダブル・イメージを、関連する事物に波及していく。これについても、Bradyの伝記によれば、やはり、Judith Wrightの幼年時代の経験とそれによって引き起こされた感情に直結する言葉である。

1918年の11月、恒例のガイ・フォークス・デイの夜に、炎に包まれた大きな人形を見て、幼い彼女は、その哀れなものを救いたいと思う。

A great vivid wall of flame springs up into a darkness of shifting
shadows and wincing leaves, sending out flights of sparks and
volumes of rolling smoke. Over it wobbles, with a terrible moustached
grin, a white giant. Fire licks his bulging stomach, eats into his
glowing, slowly splitting guts of straw, springs up to balance on
his shoulders. Surely somebody will save him?
I bury my face in something, perhaps my mother's skirts, crying
for the poor ugly giant, now bowing, grinning still, into the flames.
But everyone around is laughing and talking, and nobody makes a move
to rescue him.¹⁶⁾

暗闇に燃え上がる炎と、人身御供のごとく燃やされる大きなガイ・フォークスの人形。なぜ、人間の形をしたものが燃やされるのかについて理由を知らない幼子は、感情移入のあまり、母のスカートに顔を隠しながら、泣く。あの人形を助けて欲しいと思いながら、彼女は、「身体」と他人を認識し、責任感――それらを守る姿勢――に目覚める。Judith Wrightの、弱き者へのいたわりは、アボリジニーの問題¹⁷⁾や、原爆投下への批判へと発展していく。

Judith Wrightの子供時代の経験に基づく信念は、詩行の中の言葉に象徴的に含まれている。しかし、その信念の内容を知らなくとも、詩的言語としての力強さや美しさは、別の次元での働きの中に生き続けている。

Ⅲ. 子供の誕生

開拓者時代から20世紀初頭までのオーストラリアにおける人間の誕生や子供の状況については、Jennifer Isaacs による *Pioneer Women of the Bush and Outback* (1990) の中でも、‘Childbirth, Childhood and School’ という、独立した一つの章となっている。その時代、一般に家族は多人数で、子供の誕生についても危険がつきまっていた。開拓者として、人里離れた場所にいた場合、そこで子供が誕生する時には、医者よりも老練の助産婦が呼ばれるのが普通であった。彼女らは、必要な道具を携えて、遠い道程を馬や鉄道などに乗って、出かけて行った。Isaacs の本にも、実際に、この時代の助産婦の記録が記載されている。ニューサウスウェールズ州南部に住んでいた Mary Jane Cobden (1854-1927) も、夫の死後、10人の子供を育てながら、助産婦の仕事をしていた。¹⁸⁾ 彼女は、1900年から1923年の間、実に91人の赤ん坊をとりあげ、出生日時や体重、などを几帳面に記録している。

もちろん、子供の誕生は、母親にとっても大変なことであったが、多産多死という時代にあっては、子供は、むしろ、無事に育ってくれるほうがより大切なことであった。Judith Wright の場合も、彼女の母親がスペイン風邪にかかり、それがもとで病気がちであったが、彼女が12才の時に死んだ。Judith が、子供の目を見た母親の姿は、*Tales of a Great Aunt* にも書かれているが¹⁹⁾、このことは、子供をテーマにした Judith Wright の詩を読む場合には、心しておくことであろう。つまり、母親の姿を、子供と女性の両方の視点で捉えているからである。子供も、母親も過酷な自然状況の中で生き延びることは至難のことであり、それゆえにお互いの命の炎を燃やし続けることの大切さを、言葉を尽くして主張したかったはずである。

Judith Wright がさまざまな詩集に収録している、子供についての詩は、テーマや視点などから分類すると、4種類のものになると判断できる。つまり、①母親と子供の関係を、母親の視点から描いたもの、②オーストラリアの自然の中で成長する子供の姿を、独自のイメージラリーで綴ったもの、③この世というものを知ったり、対峙する時期の子供に対する洞察、④身近にいるわけではないが、不当な扱いを受けた子供達への同情とその状況に追いやったものの糾弾、などである。いずれも、Judith Wright 独自の、緊迫感に充ちた言葉の使用と配置があり、オーストラリアの自然が、擬人法やメタファーにより、母親や子供達に結び付く。

まず、①母親と子供の関係を、母親の視点から描いたもの、としては、1949年に出された *Woman to Man* に収められた“Woman to Child”がある。ここでは、母親の体内にいて、母親と蜜月状態にいた胎児を、この世に送り出した母親の独白が語られる。

You who were darkness warmed my flesh
 where out of darkness rose the seed.
 Then all a world I made in me :
 all the world you hear and see

hung upon my dreaming blood.²⁰⁾

母親の体内に宿る子供は、母の身体という暗闇の中で、新しい生命として、エネルギーを母親に与える。そして、その暗闇の中から、人間の萌芽ともいべき子供が育っていく。胎児は、母親に全てを依存しており、母は、生命という「一つの世界を、自分の中に造った」のである。そこでは、母親の「夢見がちに流れる血」が、体内にいる子供の世界への感覚的な窓口となっている。

Judith Wright の幼年時代の記憶におけるキーワードである、‘blood’がここでも重要な働きをしており、その「夢見がちに流れる血」が新しい命に見せる世界では、「多くの輝く星が流れ、色鮮やかな鳥や魚達が動き／大陸も、滑るように移動していった」(There moved the multitudinous stars, / and coloured birds and fishes moved. / There swam the sliding continents)。その世界には、オーストラリアの広大な大地と自然界で見えるもの達が、すでに動き回っており、新生児が経験するであろう苦難よりも、祝福が支配的である。時間、感覚、愛、といった抽象的な概念で理解される事柄も、いまだ母の中にある。胎児は、「その世界が他のものとのつながるところ、全てが集まる場所」(O node and focus of the world)である。母は、自分の深い井戸(羊水)の中で、子供をしっかり支える。時が満ちれば、その暖かい水から出て行くが、母という存在、つまり「血」の流れの中からは逃れようもない。その水は、今なお、「おまえの眠る姿を鏡のように映している」(that mirrors still your sleeping shape)。

そして、誕生の時がやってくる。それは、細胞の時から育て、刻一刻と決別の一瞬を待っていた母親にとっても、第二の決意の時でもある。

I wither and you break from me;
yet though you dance in living light
I am the earth, I am the root,
I am the stem that fed the fruit,
the link that joins you to the night.²¹⁾

このスタンザは、全体が、植物のイメージで統一されている。つまり、母親の「私は枯れていき、おまえは私から分かれていく」。しかし、母は、これから先も、子供が一人立ちするまで、生活と精神の両面において、ますます母親としての責任が大きくなる。生きるという、生命の光に輝くばかりの新生児に対して、母としての言葉は、自信と決意にあふれている。「私は、おまえの大地であり、根っこだ。／実を育てる茎だ。／あの夜に、おまえをつなぐ輪だ。」この一節の最後の表現の‘night’には、子供にとって、先行きが見えない人生航路のメタファーであるが、母親の体内の暗闇で、安らかにまどろんでいた状態をも示している。

IV. 幼年期の子供

さて、この世に誕生した子供の世界について、Judith Wright は、詩集 *The Moving Image* (1946) の表題の詩の中で、‘the green world of a child’²²⁾ と記している。そのイメージは、数編の詩の中で、植物のメタファーをもとに、子供の特徴が的確に描かれていっている。これが、②オーストラリアの自然の中で成長する子供の姿を、独自のイメージで綴ったもの、である。まず、詩集 *Woman to Man* 中の、“Child and Wattle-tree” では、子供が「黄金」の輝きの中で、大地に生き抜く姿が描かれている。オーストラリアの国花である Wattle-tree は、アカシア属の木で、この詩に出てくるワトルは、黄色い花をつけるピクナンサアカシア (golden wattle) である。子供は、黄金色にきらめく太陽のもと、ワトルの下で、あたかも小鳥のように隠れていたいと思う。細かく小さな雪のような、黄色い小片が多く集まった様子のワトルの花は、「陽光の中で、そのハチミツ色の塵が、降りてきている」(Its honey dust sifts down among the light)。しかし、子供の傷つきやすい心は、そのワトルに囲まれて、自然の中に隠れていたいと願う (to cover me and my hot blood / and my heart hiding like a sad bird)。そして、ワトルの木と一体になる幻想にも近い想像の世界で、子供は新たに生命力を与えられる。

Strong as the sun is the golden tree
that gives and says nothing,
that takes and knows nothing;
but I am stronger than the sun; I am a child.
The tree I am lying beneath is the tree of my heart,
and my heart moves like a dark bird
among its birds and shadows.²³⁾

太陽と同じく強く、何も与えず、無言のままのワトルは、人間から何も奪わず、知恵も持たない。だが、ワトルの存在は、子供に自信を与えた。「しかし、私は太陽よりも力がある／人間の子供だから」(but I am stronger than the sun; I am a child)、と、人間としての力に目覚める。ワトルの木に、黄色い花が付き、そのかすかな芳香が風にのって漂う。毎年、植物は再生を繰り返し、その生命の連続性を静かに主張する。子供は実感として思う。「その根元に横たわって、私が見上げるワトルの木は、私の心の木／私の心は、闇の鳥のように動く／木に来ている鳥達の姿と影の間を。」また、ワトルの花は、オーストラリアの国花としてばかりでなく、子供そのものに近い印象を与える木でもある。ふわふわとした黄色の花は、色以外に柔らかさと暖かさを感じさせるからでもある。

Judith Wright がイメージした ‘the green world of a child’ は、“Child and Wattle-tree” が収められた詩集 *Woman to Man* 中の一篇 “The Child” の中にも出現する。この詩は、「春の頃、知らないところに一人でいると、心が揺れ動く」(To be alone in a strange place in spring / shakes

heart)という、子供の複雑な気持ちが示された表現で始まる。人間は、一人の状態でいると、周りの状況を観察したり、自分の内面に目がいたりするが、それは子供とて同じである。特に、自然の中に一人でいることは、容易に自然に同化できるということである。子供は、突き出したような、青葉茂れる木の枝の下に、隠れる。

To hide in a thrust of green leaves
with the blood's leap and retreat
warm in you;
burning, going and returning
like a thrust of green leaves
out of your eyes, out of your hands and your feet—
to turn and to look up,
to find above you the enfolding, the exulting
may-tree
shakes the heart.²⁴⁾

子供の世界には、自己の外界の理解の際に、想像と感情移入が入り込む。隠れるという行為に、さまざまな意味が重複して、まるで「心臓の血が跳ねたり、退いたり」して、体温が上がるような気がする。血は、まるで燃えるように熱く、身体の中を行ったり、来たりする。目から、手から、足から、全身の血が巡っていく。ふと、見上げると、自分を抱えるように、生い茂ったサンザシの木がそこにあるのがわかると、喜びが溢れてくる。木々の葉が風に揺れるように、子供の心も、自然の風景にあるものに、そのナイーブな魂を揺すぶられるものである。春は、あらゆるものが生命の息吹にあふれ、子供は大人よりもその波動に共鳴しやすい。その意味で、子供時代を自然に囲まれて過ごせる人間は、祝福された人間である。

しかし、不安と大人の束縛はあっても、自然の中で自由に遊べた「子供の世界」は、やがて、大人の人間社会、つまり、知識と常識の世界に組み入れられる時がやってくる。Judith Wrightの描く、③この世というものを知ったり、対峙する時期の子供に対する洞察、というテーマは、むしろ小説の方が向いていると思われるが、詩人特有のイメージが、その変化を鮮明に表現しているともいえるだろう。「これがその子供。その子は、まだ芽吹いてもない」(This is the child. He has not yet put out leaves)というフレーズで始まる詩、“The World and the Child” (1949)がそれである。オーストラリアの自然児達も、やがて、「意味」の世界に導かれ、社会や世界の構造を知らなくてはならない時期を迎える。外界の事物の意味、抽象概念の使い方、人間関係とは何か、などは、子供にとって、学習を義務づけられたものである。しかし、主客未分化の世界に生きてきた子供にとって、どのプロセスは、より大きな疑問と苦痛を伴うものでもある。

この詩は二部に分かれており、第一部では、無知の状態で存在している子供の様子が描かれる。

子供の様子が、「むきだしの」(bare)や、「裸の」(naked)などの形容で語られ、加えて、客体を認知する力がないことが続く。つまり、彼の世界では、「何も名前を持っていない」(Nothing is named)し、「過去も未来もない」(nothing is ago, nothing not yet)。「死とは、単なる死」で、「悲しみはするが、その悲しみの意味も深さも知らない」(for the mere dead he grieves, / and grief has yet no meaning and no size)。自然界にあつては、子供の視線の低さがそのまま、彼の網膜に像を結ぶものに反映する。小さな青い花をつけて群生する、野生のブルーベルも、子供の目には青い洞穴に見えるし、アリも子供の「緑の光」(green light)の世界では、不気味な怪物に感じられる。「山の背は、夜、頭をのせる枕のよう」(The mountain range lies like a pillow for his head at night)であるし、「月は、彼の天井から揺れるもの」(the moon swings from his ceiling)である。つまり、「子供は、有限の時の間を、時を意識せずに動く波」(He is a wave that timeless moves through time)のようなのであり、自然の波動と連動している存在である。

しかし、自我の目覚めとともに、外界との間に不協和音ともいべきズレが生じる。

Yet What is it that moves? What is the unresting hunger?
that shapes the soft-fleshed face, makes the bones harden?
Rebel, rebel, it cries. Never be satisfied.
Do not weaken for their grief; do not give in or pardon.
Only through this pain, this black desire, this anger,
shall you at last return to your lost garden.²⁵⁾

自分の周囲に対して、受身の状態から自己主張の姿勢へ変化することは、反抗や苦痛、怒り、などの結果を招く。自我が、「反抗しろ、抵抗しろ」と叫ぶように仕向け、喜怒哀楽の振幅を大きくするようにさせる。外部のもの、大人をも含めて、周囲との軋轢が生じる。しかし、この修羅場、「この苦痛、この暗黒の欲望、この怒り」をくぐってこそ、最後には、「おまえの失われた園」への回路が開かれると、母として、詩人として、確信を持って言う。

「失われた楽園」とは、むろん、幼児期に楽しんだ、調和ある状態をさすが、人生経験を積んで帰っていく楽園とは、知恵と悟りを携え、魂の平安を得た人間の行き着くところである。人間は、やはり、苦しみを通じて、この世について学ぶのではないのか、と、Wright は語る。第二部では、無垢の世界を出た子供のたどる道から、始まっている。

Out of himself like a thread the child spins pain
and makes a net to catch the unknown world.
Words gather there heavy as fish, and tears,
and tales of love and of the polar cold.
Now, says the child, I shall never be young again.

The shadow of my net has darkened the sea's gold. ²⁶⁾

この一節は、漁師が海で漁をするイメージリーで統一されている。即ち、子供は、「自分の苦しみを糸として織りあげた網で、この未知の世界を捕まえようとする。」言葉は、物を理解する媒体であるが、その網の中にずっしりと、魚のように、多くかかっている。また、涙も、愛の物語も、極地の寒さも、網に入ってくる。もう、昔に戻れない、と、子供は言う。自分がかかる網の影が、黄金色に輝く海を暗くしてしまったから、と嘆く。

人間が子孫に伝える形で造りあげた社会に生きるために必要な知恵は、一人の人間の理解の範疇には収まるはずがない。「この世は何か？その秘密は誰も知らない」(What is the world? The secret no man knows)のであり、「その網は色褪せ、人は空しく死んでいく」(Nets have been breached and men have died in vain)。つまり、「どんな網も、世界を捕らえるほど強くはないのだ」(No net is strong enough to hold the world)。しかし、人間の尊厳は、希望とともにあるものである。「再び、血が流れる両手で、おまえの網を打ってごらん」(Yet gather in your bleeding hands your net again)、と、母は勇気づける。怪獣リヴァイヤサンが網にかかるまで、決して満足するな、と。想像上の怪獣を捕らえるということは、詩人が、この世を神秘に満ちた、生きるに値するところであると断言していると考えられる。逆説的に言えば、未知の世界があるからこそ、たとえ、罪や悪に薄汚れても、生きていく価値がある、ということでもある。この詩の詩行には、予言的語りが散見され、子供を見守る母の言葉以上の英知が盛り込められている。

V. 終わりに

Judith Wright は、詩人として、一人の母親として、一般に弱き者とされている存在に、限りなく優しい眼差しをもった人間である。差別されている人間、力のない人間、社会的な弱者、そして子供達、などを描く、その視点は、まず対象の心の中に入り込み、その立場を理解することから生まれる。伝記にもあったように、理不尽な仕打ちを受ける者への同情は、社会を形成しているさまざまな要素を点検し、事実関係が分かってから、講演、小説、そして、詩の形式で、自分の立場を明らかにする。

その弱き者のグループにあって、子供は、唯一、母親の身近にいて、「人間とは何か」というテーマに沿った観察が可能な存在である。開拓者時代における子供の誕生は、Jennifer Isaacs の資料にもあったように、大家族や多産多死の状況にあって、祝福よりも、育児の大変さを意味するものであった。過酷な自然環境のもと、子供達は生まれ、母親は、家族の世話のために十分な休養もとらずに、家事に復帰したため、命を縮めた者もいた。オーストラリアの大地に生きていくためには、健康と愛情が不可欠であった。Judith Wright の詩に見られる子供達と、母親の思いは、卓越した表現の技巧に支えられたテーマの発展の中に、生き生きと描かれている。母の胎内にいる子供や、誕生の瞬間、自然の一部になって遊ぶ子供達、そして、やがて自我の萌芽とともに、世界や人間社

会を知っていく、そのどの段階をとっても、人間への信頼を失わない Judith Wright の信念が読み取れよう。あわせて、現代社会で詩を書く人間として、言葉の響き合いを巧みに利用し、過去と現在の両方に通底するイメージを作り上げている。

なお、Judith Wright の詩に描かれた子供像の中で、④身近にいるわけではないが、不当な扱いを受けた子供達への同情とその状況に追いやったものへの糾弾、については、他のテーマとの関連もあって、今回は省略した。

Notes

- 1) Judith Wright, *Collected Poems* (Angus & Robertson, 1994) , p. 20.
- 2) *Ibid.*, p. 21.
- 3) *Ibid.*, p. 28.
- 4) *Ibid.*, p. 31.
- 5) *Ibid.*, p. 34.
- 6) *Ibid.*, p. 36.
- 7) *Ibid.*, p. 61.
- 8) *Ibid.*, p. 66.
- 9) *Ibid.*, p. 66-67.
- 10) *Ibid.*, p. 106.
- 11) *Ibid.*, p. 150.
- 12) *Ibid.*, p. 191.
- 13) *Ibid.*, p. 238.
- 14) *Ibid.*, p. 373.
- 15) Veronica Brady, *South of My Days; A Biography of Judith Wright* (Angus & Robertson, 1998) , p. 2.
- 16) *Ibid.*, p. 2-3.
- 17) Judith Wright, *The Cry for the Dead* (OUP, 1981) を参照。
- 18) Jennifer Isaacs, *Pioneer Women of the Bush and Outback* (Lansdowne Press, 1990) , p. 127.
- 19) Judith Wright, *Tales of a Great Aunt: A Memoir by Judith Wright* (An Imprint Book, 1998) , p. 12.
- 20) Judith Wright, *Collected Poems*, p. 28.
- 21) *Ibid.*, p. 29.
- 22) *Ibid.*, p. 3.
- 23) *Ibid.*, p. 31.
- 24) *Ibid.*, p. 34.
- 25) *Ibid.*, p. 37.

26) *Loc. cit.*

Bibliography

- 1) Bennett, Tony et al., eds. *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*, St. Leonards: Allen & Unwin, 1992.
- 2) Brady, Veronica. *South of My Days; A Biography of Judith Wright*, Auckland: Angus & Robertson, 1998.
- 3) Cathcart, Michael. *Manning Clark's History of Australia*, Melbourne: Melbourne University Press, 1993.
- 4) N. グリーブ他編, 加藤愛子訳。『フェミニズムとオーストラリア』, 東京: 勁草書房, 1986。
- 5) Hampton, Susan & Kate Llewellyn eds. *The Penguin Book of Australian Women Poets*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1986.
- 6) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1988.
- 7) Isaacs, Jeniffer. *Pioneer Women of the Bush and Outback*, Smithfield: Gary Allen, 1990.
- 8) Lever, Susan ed. *The Oxford Book of Australian Women's Verse*, Melbourne: OUP, 1995.
- 9) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
- 10) Rowe, Noel. *Modern Australian Poets*, Sydney: OUP, 1994.
- 11) 関根政美, 他著。『概説オーストラリア史』, 東京: 有斐閣, 1988。
- 12) Strauss, Jennifer. *The Oxford Book of Australian Love Poems*, Melbourne: OUP, 1993.
- 13) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1991.
- 14) Walker, Shirley. *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1991.
- 15) Wilde, William, et al., eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition, Oxford: OUP, 1994.
- 16) Wright, Judith. *Collected Poems 1942-1985*, Auckland: Angus & Robertson, 1994.
- 17) Wright, Judith. *The Cry for the Dead*, Melbourne: OUP, 1981.
- 18) Wright, Judith. *Tales of a Great Aunt*, Sydney: An Imprint Book, 1998.
- 19) Wright, Judith. *The Generation of Men*, Sydney: An Imprint Book, 1995.